栗狭間（くりはざま）遺跡

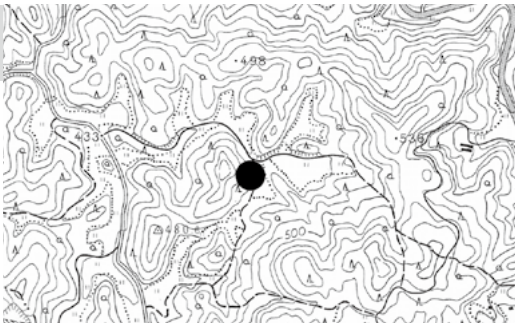
所　在　地　豊田市下山田代町栗狭間
（北緯35度1分26秒 東経137度19分32秒）

調査理由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間　平成25年4月～平成25年11月

調査面積　3,170㎡

担　当　者　武部真木



調査地点（1/2.5万「大沼」）

調査の経過　調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発用地施設造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて実施した。調査期間は平成25年4月から11月であり、本調査の13A区・13B区・13C区3調査区と範囲確認調査（70㎡）を合わせて計3,170㎡の面積について調査を行った。

立地と環境　遺跡は、豊田市下山田代地内にて郡界川に合流する沖川上流の右岸丘陵部に位置する。本年度調査地点の地形は、北向きに開口する谷部を中心とした範囲であり、昨年度調査の12B・12D区に挟まれた13A区と、12B区南側に接する13B区、さらに13A区南側崖上の13C区という位置関係にあり、隣接した範囲を調査することになった。標高では13C区が462～469m、13A・B区は約459mである。

調査の概要　13A・B区は、調査区ほぼすべてが南西部と南東部の谷を源とする自然流路と氾濫原に含まれる。東側丘陵の縁に沿って北流する13A区001NR埋土は、概ね上からA層；褐色粘

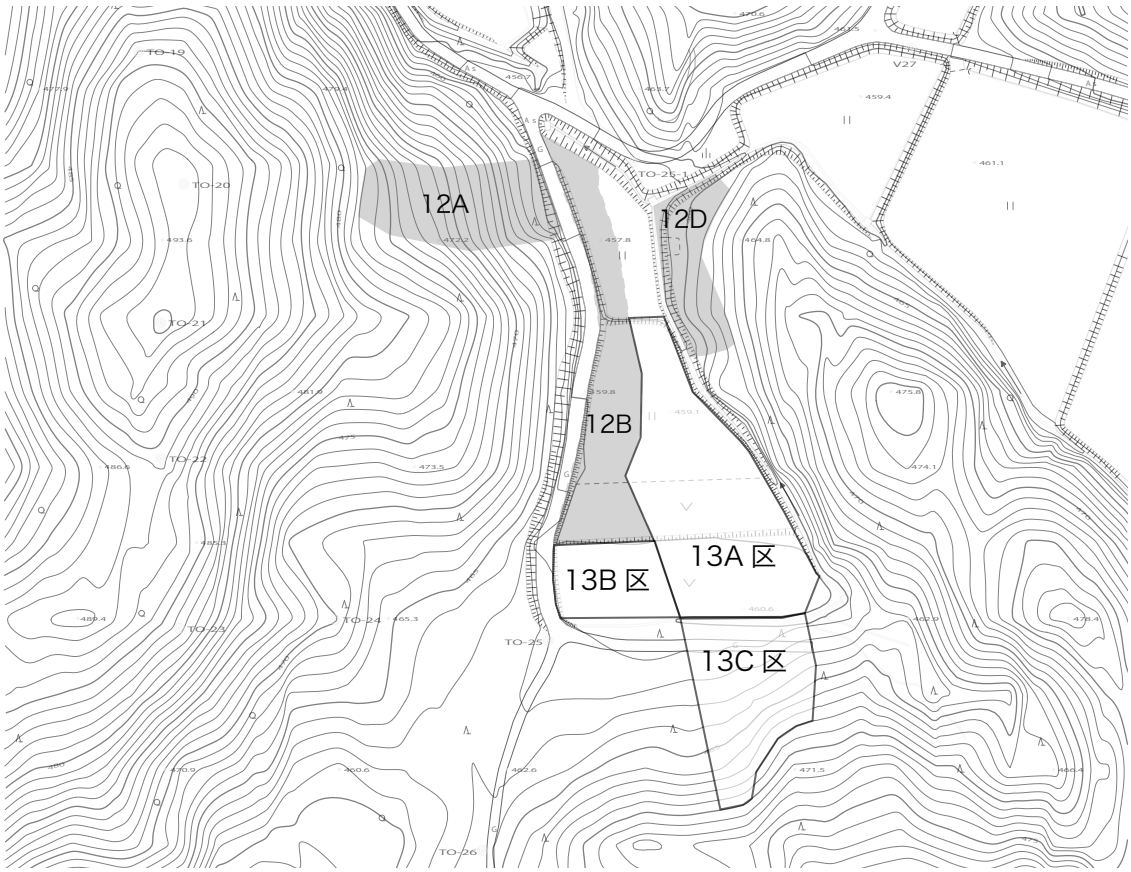


図1　調査区位置図（1:2,000）

土質シルト、B層；黒色シルト～砂質シルト、C層；黒色粘土、D層；腐植物と粗粒砂の互層に大別でき、D層に含まれる灰釉陶器および植物遺体の分析（14C年代測定）により、少なくとも平安時代以降には主要な流路となり、中世の遺物を含むB層が堆積する頃に急激に埋積が進んだとみられる。注目すべき遺物として、流路の広い範囲のB層から山茶碗・小皿のほか加工痕のある木片類が大量に出土している。これらはスギ・ヒノキなど針葉樹を材に用い、形状は端部に切り欠きのある木簡状を呈するもの、一辺が10～15cm程度で中央付近に一つの穿孔をもつ長方形の板片、あるいは長さ90cm前後の棒状のものなど一定の規格の存在が認められるものが含まれる。これら木片の用途は不明であるが、製材等の加工作業が行われていたことが明らかとなり、隣接する谷地形を中心に範囲確認調査を行った。その結果、作業場所の特定には至らなかったが、トレンチの一つで加工木片を採取したことにより、さらに上流域で活動が行われていたことが判明した。

13C区の地形は丘陵端部付近の緩斜面であり、調査区北端は001NRなど河道や人為的に削られた崖面をなしている。基本層序は、上から表土（腐植土）、しまりの弱い黄灰色シルト層、黒色土層の順に堆積がみられ、風化花崗岩の基盤層に達する。13A区南東端で縄文晩期（樫王式）の土器がまとまって出土したことから崖上に活動域が予想されたが、明確な遺構は確認されず、黒色土層直上で土器の分布範囲を検出した。また基盤層に近いところで検出した黒色土を埋土とする土坑（038SK,068SK）は、底面に直径10cm前後のピット1基をもつ楕円形土坑であり陥穴と考えられる。

ま と め　今回の調査では明確な遺構がほとんど認められなかったものの、自然流路から旧石器、縄文時代草創期・早期・前期・晩期、古代（9世紀後半）、中世、近世の遺物が出土した。集落遺跡と比較して遺構・遺物ともに希薄ではあるが、こうした成果は山間地の生業の実態を伝える資料として、評価の方法から再検討される必要があろう。（武部真木）

遺跡遠景（北から,写真中央奥から左手は鶴ヶ池遺跡）

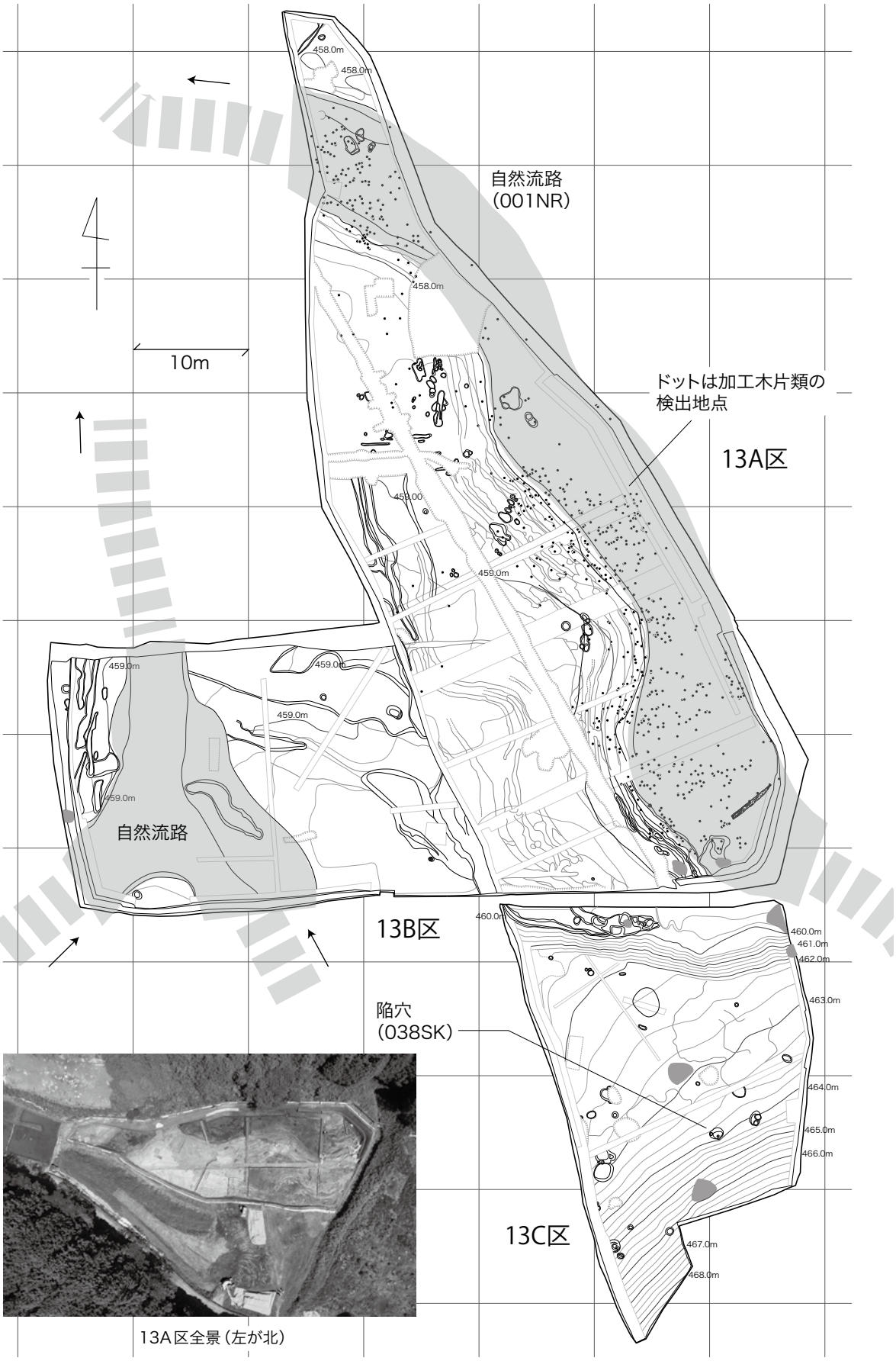


図2　栗狭間遺跡13A･B･C区主要遺構配置図（1:500）

13B･C区全景（北東から）

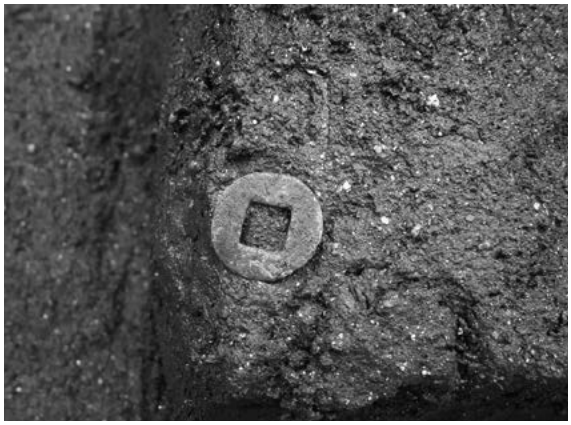
13C区038SK（北から）

スクレーパー（白色石材, 13A区出土）

有舌尖頭器（下呂石, 13A区出土）

石製垂飾（蛇紋岩, 13A区出土）

木簡状の木製品（13A区001NR）



無文銭（13A区001NR）

加工木片類と中世陶器（13A区001NR）